

第十七回盛岡市民演劇賞

●〈講評・審査委員長 岡部玄治〉

受賞された団体ならびに個人受賞の方々、おめでとうございます。お祝い申し上げます。

始めに審査経過を報告します。

今月、七月十七日(水)、夕六時半より、当公民館の会議室において、審査委員八名全員出席のもとに、審査会を行いました。

今年度、第十七回盛岡市民演劇賞の審査対象となった公演数は、前年度より、四公演減少の三十四公演三十七作品でした。

審査委員は、二月にも集まり、上半期分の意見交換を行っており、加えて一年間を通してと、例年通りに、委員の推薦する舞台、三作品ずつを挙げて検討、協議に入りました。

【話題になった舞台作品】（公演月日順）

- 劇団黒猫舎「イーハトーヴからやってきたある夏の夜のお話」
- 劇団コトナコナタ「石館さんちのお孫さん」
- 劇団ゼミナール「無限スープ」
- 架空の劇団「生還」
- 八時の芝居小屋・トラブルカフェシアタープロデュース「幻書奇譚」
- 劇団・風紀委員会「焼肉王」

- 八時の芝居小屋制作委員会プロデュース「バンク・バン・レックスン」
 - 劇団しばいぬ「人生ゲーム」
 - 演劇ユニットせのび「なくなりはしないで」
 - 同 「月の流した涙、やがて君へ、海へ、たどり着く」
 - いわてアートサポートセンタープロデュース「ジョバンニの切符」
 - カンザスハリケーン「Tender Rain」
 - ライナー・ノーツ「ジュエリー・ジュエリー・ジャックポット」
 - 架空の劇団「八本桜」千手院野外公演・専立寺本堂公演
 - 劇団赤い風「みちのく奇譚・星降る丘」
 - ボーイズドレッシング「ああ、どうしましょう」
- 以上、十六作品挙がりました。

＊

これらに見られるように、委員八名のそれぞれの見方が、大賞、各部門の選択に反映して、多様ですので、例年、始めから全員一致ということは先ずもって、ないことです。

各委員、同じ価値基準を共有してのことではなく、見識、感性等、それぞれに従って優れている作を挙げますので、協議の必要も意義もそこにあります。

演劇賞実施要綱に沿って、観客賞に寄せられたコメントの内容も参考にして、話し合います。そういうなかで、自ずと大賞と各部門賞に納まるべくして定まる、

というのが審査過程です。

●そのようにして、賞をお贈りすることに決まった団体、個人を発表、併せて講評をいたします。

【大賞】架空の劇団「八本桜」

もつとも話題を集め、千手院、専立寺での公演ともに高い評価を得ました。

八本桜のなかに迷い込んだ青年に、死者たちが身の上話を語るといふ虚実と現代・過去の往還が作品に奥行きを与えていたと思います。

八本の桜を八人の死者に見立て、その死者と生者との間をつなぐ構成が優れていると認められました。またキャストそれぞれ異なった役柄に、個性が活きて、演じられているのも見どころでした。作の高橋拓さん、演出のくらもちひろゆきさん、キャストの皆さん、スタッフの皆さん含めて、舞台作りの呼吸が合っているとの総合評価でした。

【部門賞】

次に部門賞に移ります。五名の方々の優れた表現活動を表彰いたします。

▼創作戯曲部門 くらもちひろゆき（架空の劇団）

「生還」

亡くなった人のお別れ会準備という、身近な出来事に触発されたの作であり、足が地に着いているという印象を持ちました。登場人物の人間関係や会話にそれらは表れていて、いかにもありそうな、落ち着きのあ

る舞台でした。それには、くらもちさんの戯曲が与っている判断され、評価を得ました。

▼演出部門 ベロ・シモンズ（ボーイズドレッシング）

「石館さんちのお孫さん」

舞台は演出が決定する、と何処かそう思っている意志の感じられる観劇体験でした。舞台空間を縦にも横にも奥にも広げて見せる照明や映写の工夫がありました。加えて、意外性の連続に、観客が主人公とともに怖さを体験するというホラー作品に仕上げたのは演出の力であろうと認められました。

▼演技部門 菅野崇（フリー）

菅野崇さんは劇団には所属しておらず、フリーという立場で、様々な舞台に立って、審査委員の注目するところとなりました。「石館さんちのお孫さん」「焼肉王」「ジュエリー・ジェリー・ジャックポット」において、それぞれの役を演じ分け、エネルギッシュな活動が推薦されました。

▼演技部門 中村輝（カンザスハリケーン）

「Tender Rain」において、人間と同じ感情を持つ玩具としてのアンドロイドの好演に評価が集まりました。内圧を高めた演技には目を瞠るものがありました。旗揚げ公演にして、キャスト二人だけの張り詰めた舞台に次作が期待されます。もう一人の坂戸公輝さんにも将来性を感じました。

▼音響部門 佐藤浄（架空の劇団）

音響、音楽を流して雰囲気を作るのは簡単です。安

易に使われやすいため、それには頼らないという演出家もいます。しかし、巧く使えば効果をあげます。「八本桜」においては、各登場人物に異なるオリジナル曲を付け、登場人物の背景それぞれを包み込んで、結果として舞台を魅力あるものにしていました。

*
なお、部門賞につきましては、観客賞以外の五部門を表彰としておりますが、十部門を対象としているため、その年度ごとに表彰部門は変わります。今年度のように、優れた表現活動の方が同部門に複数いる場合は、同部門複数授賞もあることを、お伝えします。

*
●さて、最後となります観客賞についてですが、残念ながら、規定の最低票数二十票に届かず不成立という結果になりました。

観客賞の投票には、審査会も注目しております。五作品以上観劇した人の記名投票であり、二十票以上をもつて成立ですから、もう一つの審査と言つてよいものです。演劇賞実施要綱には、観客の意見を反映させる」と明記されています。演劇活動振興の観点からも、一般投票の参加は今後、より増えてほしいと願っています。

*
最後になります。皆様の舞台活動には常、敬意を払っています。敬意なくて審査はできないものです。

以上、受賞の団体、個人及びその関係者の皆様に、心より祝意をもちまして、講評を終わります。